https://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/　平成31年3月11日発行

中北.com

チュウホク ドット コム

地域教育情報紙

no. 6

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

TEL 0551-23-3046
FAX 0551-23-3013

中北の地域社会（community）の心の交流（communication）をめざします

第3回 峡中・峡北地区　地域教育推進連絡協議会　開催

平成31年１月30日（木），北巨摩合同庁舎において，第３回峡中・峡北地区地域教育推進連絡協議会が開催されました。峡北地区の矢巻令一会長（韮崎市教育長）の挨拶，今年度の事業経過報告に続き，来年度に向けて地域教育推進連絡協議会の「再編」について協議が行われました。協議の結果，これまで峡中地区と峡北地区に分かれて行っていた協議会を一つにまとめ，『中北地区地域教育推進連絡協議会』と名称を改め，業務の効率化を図ることが承認されました。

後半は，研修会として，一般社団法人「育みの会」代表理事である内藤陽一氏を講師にお迎えし，講演が行われました。以下は講演の概要です。

峡北地区　矢巻令一 会長

講演 :「子ども食堂の活動を通じて見えたもの」
一般社団法人　育みの会　代表理事　内藤　陽一 氏

◆ 一般社団法人「育みの会」の活動 ◆

「育みの会」では「ひがしっこ子ども食堂」を開催しており，先週62回目を記録しました。今は空き家を利用して，月に2回，子どもの調理体験を中心に，地域交流を含めて，子どもの居場所作りのために活動しています。「こども食堂ネットワーク」という全国組織にも加盟しており，研修会等にも積極的に参加しています。中間支援組織としても活動しており，去年も2つほど子ども食堂の立ち上げに関わらせていただきました。また，私たちの持っているノウハウを注ぎ込んで次の後継者を育てる活動もやらせていただいています。

また，学校を通じて子どもを支援する活動も行っています。学校に売れ残りのパンやお米を届ける活動もしています。子ども食堂にはお米が集まってきます。玄米を頂きますので，コイン精米で精米してから届けています。今日もこの講演が終わってから行くことになっています。

◆「子ども食堂」とは？ ◆

地域の大人が子どもたちに無料や安価で食事を提供する，民間発の取り組みです。2012年に「こども食堂」という名前が使われ始め，7年間，その活動が続いています。私たちが関わらせていただいた時には，まだ80ヶ所ほどしかありませんでしたが，今や全国で約3,000ヶ所と言われています。最近は，子どもたちの親，高齢者，障害者，外国人など，対象を限定しない食堂も増えています。

私たちのネットワークの一員として月2回の活動している富士河口湖町の「かかし食堂」は，借家を食堂として子どもたちに開放しています。また，近くにカフェ併設のドラッグストアが有り，そのスペースを無料で地域の人々に開放しています。ここで「かかし教室」という形で，地域の子どもたちに地域との連携で学習支援も行っています。地元の皆さんによると，子どもたちの学力格差が大きいため，何とかしなければという思いから活動しているそうです。

甲府市にある「えにしこども食堂」は，私が立ち上げ支援した子ども食堂で，月に1回，開催されています。甲府市貢川に「ENISHI」というコミュニティーサロンがあり，その会員さんの寄付で運営されています。子どもと大人で60名くらいの参加者があり，HOTな子ども食堂です。

長野県のある地域では，文科省で推奨している「放課後子ども教室」を利用して，子どもたちの調理体験を行っています。教育委員会や学校を巻き込んでできた初の試みです。私たちの活動にしましても，「学校で子ども食堂」というのが一番よいシチュエーションです。場所も分かっているし，公益性もあるからです。山梨県では，なかなか実現しませんが，長野は教育県だから凄いなというのが実感です。

◆ 子どもや家庭を取り巻く貧困問題 ◆

子どもや家庭を取り巻く貧困問題の話をしておこうかと思います。国の方でも「子供の未来応援基金」という施策を講じています。「日本財団」という公益団体がありますが，何もしないと年間43兆円の所得が消失していくので，子どもの貧困対策をしていかなければいけないと言っています。少子高齢化対策よりも先に貧困対策をして行きましょう，ということが実際のところです。

貧困になると，どういうことになるかというと，「貧乏だから，どうせ家（うち）なんか…，僕なんか…」と，子どもたちはよく口にします。「どうせやってもしょうがないし…」と言って諦めてしまいます。先進国の中でこんなに諦めてしまうのは，日本くらいしかないそうです。ＮＧＯの方がフィリピンなどに行くと，向こうの子どもたちの方がまだ真っ直ぐで前を見ていると感じるようです。「医者になりたい，教員になりたい，頑張ればなれる」ということを意識して生活しているそうです。

諦めてしまうと，生活のリズムも乱れてきます。スマートフォンに依存したり，ユーチューブなどを見入ってしまうと，一晩中起きていて，朝起きられないということになります。

また，「お金がない ＝ 安い食材を買う」ということになります。そこで，安い菓子パンばかりを買って食べてしまいます。そうすると，炭水化物と脂質は多いけれど，ミネラルやビタミンＣが摂れていないという現象が起きます。太った子どもは栄養失調ではない，と多くの人は考えがちですが，実際，栄養士の先生によると，そういう子どもたちの方が栄養失調なのだそうです。やはり，ミネラルのバランスが崩れているからです。

起きられない，学校に行けない。学習指導要領の改定により「ゆとり教育」から「根詰め教育」に変わっていく中で，子どもたちは勉強にどんどん遅れてしまいます。お金があれば，学習塾に通い，授業の補修を受けられますが，お金がなければできません。親は働かなければならず，ダブルワーク，トリプルワークとなり，地域と孤立してしまいます。周りとの関係が希薄化してしまいます。

◆ 貧困と児童虐待は表裏一体 ◆

千葉県の野田市の事例もそうですが，貧困と児童虐待は表裏一体です。貧困の裏には児童虐待があると思った方がいいと思います。

日本は最近まで，6人に1人が貧困状態で，先ほどの「子供の未来応援基金」で寄付を募り，活動団体への助成等を行い，7人に1人までに改善されましたが，まだまだ足りていません。沖縄の子どもの貧困は3人に１人で，「沖縄の子どもは見捨てられているのでは…？」とも言われています。基地の問題がありますが，実はその中でも，米兵が子ども食堂をやっています。そこには何百人という子どもたちが救いを求めてやって来ます。報道はされていませんが，沖縄は基地問題の陰で，子どもの貧困がとても深刻でして，実際，見に行った方々が言いました。「沖縄の子ども食堂は『ギブミーチョコレート』だよ，あの時代だよ」と。沖縄は，今，そのくらいひどい状況です。

“SDGs”の第１目標

現在，山梨は子どもの10人に1人が貧困に陥っていると言われていますが，アンケートが抽出によるものですので，実際のところは，少なくとも，子どもの10人に1人が貧困状態であるとお話しさせていただいています。地域によっては３人に１人というところが，実は，甲府にもあります。数字で平らにすれば10人に1人かもしれませんが，地域差があるということはお伝えしておきます。よく自治会の方に，「そういう子は本当にいるの？普通にいい服着て，スマートフォン持ってるのに？」と言われますが，今，服も安いものが買えますし，中古でも程度のいい物が百円くらいで売っているので，そういう服を着ていると分かりません。昔は貧困となると，「いかにも」という格好でしたが，今は外見からは分かりません。

経済状態もしかりなのですが，心の貧困を抱えている保護者の方もいらっしゃいます。「自分のことをオープンにできない」，「こういうことを誰に相談していいか分からない」というのがキーワードとして出てきますが，実際，相談する相手がいないのが現状です。

それに伴って，最近よく聞かれるのは，新型うつ病（遊ぶ時は元気であるが，仕事に行けない）の保護者が増えてきています。〇〇依存症（アルコール，ギャンブル，ネット，スマホ）が影響していて，食事も作らない，仕事もしない，ということもあり，収入が減っています。子どもが発達障害を抱えていることで仕事ができないということもあります。

先ほど申し上げたように，貧困と表裏一体なのが児童虐待です。虐待の分類はこの4つです。①身体的虐待：殴る蹴る，②性的虐待：性的な暴行，性的行為を見せるといったことも性的虐待になります。最近増えているのは，以下の２つです。③ネグレクト：放置と④心理的虐待：恫喝（どうかつ）を加えること。最近，この「恫喝」という言葉をよく耳にします。千葉県野田市のあのニュースで子どもが父親に恫喝された，脅されたと。

全国の児童相談所が対応した児童虐待相談の件数は，1990年には1,100件くらいでしたが，2015年には103,260件で，ネグレクトと心理的虐待が増えています。実は，189（児童相談所全国共通ダイアル）に電話すると，最寄りの児童相談所に繋がる仕組みになっています。通報者の名前は聞きますが，対象者には絶対開示しません。通報者保護で通報し易くなったのが件数の増加の原因の一つです。しかしながら，山梨県立大学人間福祉学部の西澤哲教授（虐待問題の専門家）によりますと，この数字はまだまだ氷山の一角だそうです。

実は，私たちの「育みの会」も，児童虐待防止のオレンジリボン運動に加盟しており，児童虐待防止に関しては熱い思いがあります。

◆ 子ども食堂の活動から見えてきた社会課題 ◆

子ども食堂の活動から見えてきた社会課題ですが，心が寂しい子どもたちが多いです。そこに対する支援も必要で，気軽にお互いが話をできる関係が地域にできればいいと考えています。子どもばかりではなく，大人もちゃんとケアしていこうと思っています。活動の中で食料支援を行っており，毎週火・木で支援していますが，ある小学校だと，連絡ノートすら買えないというところもあります。実際，その学校では，児童の半分が朝食を食べていないそうです。そういう状況がありまして，学用品の支援も必要です。中学の制服に関しても，ネットワークができていれば，「あそこの子どもが卒業するから譲って貰えればいい」という話もできます。そこに対する支援の必要性も感じています。

意外にも子どもを支援しようとする団体は多いのですが，横の連携がありません。連携していかなければいけないということで，先ほど紹介させていただいた「食でつながるフェスタ山梨」を開催しています。また，学校や行政とも連携していかないといけないと実感しています。

次に，コーディネーターの必要性ということです。スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーさんが民間にもいて，相談できるような場所が地域にも必要だと実感しています。民生児童委員さんもいますが，ほとんど高齢者のサポートに行ってしまい，子どものサポートは個人情報の壁があってなかなか先に進めないようです。

◆ 負の連鎖と，それを断ち切る活動 ◆

子どもは，安価で偏った食事により，低栄養状態に陥ります。そして，生活のリズムが乱れ，病気に罹かります。保護者は，子どもの世話などで収入が不安定になり，うつ病を患ったりストレスも増加します。そして，「しつけ」と称して子どもを虐待します。大人に認めてもらえない子どもは，自己否定し，不登校になったり非行に走ります。その結果，学力格差が生じ，社会順応性が低下し，大人になっても定職に就くことができず，収入も低下します。そして，そこには新たに，貧困による低栄養状態が再び巡って来ます。

まず，できることからやってみましょうということで，子ども食堂では調理体験をさせています。簡単に作れるものから始めています。また，子ども食堂の活動をしていると，いろいろな食材が集まってきます。その食材を有効活用するために，ただ届けるのではなく，家の中の様子を見て，話を聞くことも重要と考えています。

そして，これは全国的な動きですが，学校や家庭ではない第三の居場所を作りましょうということで，自治体と私たちのようなＮＰＯの団体がタッグを組んで，地域に拠点を作る働き掛けをしています。日本財団としては，全国に必ず1ヶ所ずつ作りましょうということで動いていますが，山梨は，なかなか進んでいないのが現状です。子どもたちが交流することで，いろいろな話が聞けますし，他では話せない悩みも聴けたりするので，是非，山梨にも必要です。

子ども食堂で子どもたちが調理をする場合，例えば，どんな切り方であっても，子どもたちを基本的には否定しません。聞かれた時はまず，「自分たちが食べやすい大きさに切ってみよう！」と答えます。うちの場合は，そこからスタートです。包丁の持ち方は，「猫の手」だと必ず教えます。それがいつの間にか子どもたちに伝わって，ずっと通っている子は，新しく来た子に「猫の手でやるんだよ」と言って教えるようになります。そして，「君，いいね！いい仕事するね！」と言って，私たちは子どもたちを褒めて，子どもたちに自信をつけていきます。ただ，包丁を振り回して遊ぶなど，命に関わるようなことになりかねない場合には，叱って指導しますが，基本的には見守りです。指導が過ぎてしまうと，指示待ち人間になってしまうからです。だんだん気づく子どもは，周りの動きを見ていて，「じゃ，あそこを手伝いに行こう！」みたいな感じになってくるので，そういう心も育まなければいけないと思います。また，親よりも第三者の大人に褒められる方が，子どもはもっと伸びるということをこの活動を通して実感しました。子どもの自立心を育み，子どもたちを肯定する場所が必要なのです。大人やいろいろな友達と交流することで，社会に出る時に不安なく職場にも行けるのではないかと思っています。今，誰かがこういうことをやらないと，子どもたちはどんどん大変な状況に置かれるというのが正直なところです。

子どもが一番でないと，この活動は続きません。大人が一番になってしまうと，子どもたちは空気で感じます。「ああ，ここ，大人食堂じゃん」という話になって，来なくなってしまいます。子どもたちが楽しいと感じ，働くことで物が食べられるということを体感してもらい，金銭面でも無理せず活動できる体制作りを心掛けています。

「ひがしっこ子ども食堂」に来た子どもたちがどうなったかと言いますと，家でも手伝いをするようになったそうです。それまでは，上げ膳据え膳が当たり前でしたが，ここに来てから，お皿を洗ったり，お米も研げるようになりました。小さい頃からこういうことをやって行くと，遊びの一環で調理するという感覚が身につくと思います。

◆ 社会資源としての子ども食堂の課題 ◆

誰かが新しく子ども食堂を始めるに当たっては，スタートアップを支援する必要があります。食事を大量に調理して提供するということは，衛生面に関する知識がないと危険です。前の日にカレーを作り，翌日出すということになると，食中毒の元です。ウェルシュ菌という，芋などにつき易い菌がありますが，よくかき混ぜて空気を入れてやらないと，食中毒の原因になります。また，塩素剤やアルコールは消毒のため頻繁に使います。そうしないと食中毒が出た時に，「あそこの子ども食堂，やらかしたよ」ということで，全国のマスコミが取り上げる事になります。そうなると，3,000ヶ所ある子ども食堂に影響します。子ども食堂は意外に簡単に始められそうではあるけれども，その辺について細心の注意が必要です。

また，保険を掛けていない子ども食堂さんが多いのも現状です。私たちは，保険の重要性は既に分かっていましたので，スタート時から「事業包括保険」を掛けています。やる側もリスク管理は必要ですし，来てもらうためにはやはり安心安全な場所でなければいけないということで，スタートアップの支援として話をさせてもらっています。

もちろん，この活動は賛同者がいないと続きません。「内藤君の活動，応援するよ！」と言ってくれる方は増えていますが，ここまで来るのにも正直，大変だったと今実感しているところです。それでも，62回まで活動できたのは皆様の応援のお陰であると感謝しています。

さらに，食料が偏った団体に集まるのではなく，皆でシェアすることが必要ということで，子ども食堂がネットワークとしてつながる必要があります。実は，「やまなしこども食堂ネットワーク」というのを既に立ち上げておりまして，5団体ほどが加盟しているという状況です。今後は山梨のルールを作り，標準化することも必要ですし，後継者を作るということも必要かなと思います。

◆ 行政も動き始めました！ ◆

先ほど，行政との連携という話をさせていただきましたが，実は，山梨市で嬉しいことが起きました。子ども食堂に対して補助金を出すということで，公募がありました。既に募集は締め切られましたが，4団体ほどから応募があったそうです。こういう実例が出るだけでも状況は違ってくると大いに期待しています。

本日，私たちは，「子どもたちの笑顔のためにこのような活動をずっと続けていく」ということで，ご紹介させていただきました。ご静聴，ありがとうございました。

お年寄りとの交流 ～ クリスマス会 ①・②

①「げんき夢こども園」の年長さん と 「ふれあいサロン中島」の皆さん

12月20日（木），昭和町の河東中島第一公会堂で，「げんき夢こども園」の年長さんと，河東中島区「ふれあいサロン中島」のお年寄りとのクリスマス会が開催されました。

「こんにちは！」…大きな声で元気に挨拶しながら公会堂に入ってくる園児たちの声に，会が始まるのを今か今かと待ち望むお年寄りの顔が自然とほころびました。近年では核家族化が進み，お孫さんと触れ合う機会が少なくなる中，お年寄りはこの交流の場を大いに心待ちにしているようです。

『甲州弁ラジオ体操』で，お互いの心も身体もすっかりほぐされたところで，会の前半は，園児たちによる発表の時間です。最初を飾るのはピアニカの合奏です。園の方針で，練習は子どもたちの自主性に任せているそうですが，とても息の合った聞き応えのある演奏でした。続く合唱にも子どもたちの積極的な意見が反映されていました。「たくさんの人に伝えたい」という思いから歌詞に手話を付け，「季節の歌を歌いたい」という思いから，秋や冬を楽しむ曲が選ばれました。締めくくりは，お年寄りと一緒に『たき火』を大合唱し，会場全体が和やかな空気に包まれました。

後半は，幾つかのグループに分かれて，園児とお年寄りが折り紙・パズル・あやとりを一緒に楽しみました。畳に座り，肩を並べて一緒に遊ぶことで，心の交流は更に深まったように感じました。最後は，園児が折り紙でペンギンを作り，お年寄り全員にプレゼントしました。思いがけないプレゼントに，お年寄りはとても嬉しそうでした。

おわりの会では，サロンを代表して区長さんから「今日は楽しい時間をありがとうございました。いつも皆さんから元気をいただいています！」という感謝の言葉と共に，お礼の品として子どもたちに折り紙セットが贈られました。

②「甲府市立北西中学校」の生徒さん と 福祉施設「志麻の郷・湯村」の皆さん

12月26日（水），甲府市立北西中学校の生徒の皆さんが，近隣の湯村温泉郷にある福祉施設「志麻の郷・湯村」を訪れ，施設を利用しているお年寄りと一緒に一日遅れのクリスマス会を楽しみました。夏に引き続き２度目の訪問となった今回も，ふれあい活動満載の心温まる交流となりました。図書委員による絵本の読み聞かせでは，生徒の朗読に熱心に耳を傾け，物語を楽しむお年寄りの姿が印象的でした。続いて行われた吹奏楽部の演奏では，音楽に合わせて手拍子を打ったり，身体を揺らしてリズムを取るお年寄りも多く見受けられました。

また，少人数のグループに分かれて行われた「風船バレー」では，中学生のサポートを受けながら，風船を床に落とさないように一生懸命に打ち返そうとするお年寄りの頑張りに，見ているこちらも思わず声援を送りたい気持ちになりました。最後は，サンタクロースやトナカイのコスチュームを身にまとった中学生から，お年寄り一人ひとりに温かい言葉と共にクリスマスプレゼントが手渡されました。

ふれあい委員や生徒会長の挨拶をはじめ，生徒の皆さんがお年寄りに語りかける言葉は，聞き取り易いようにはっきりと，ゆっくりと，語られました。また，笑顔を絶やさずにお年寄りと向き合う姿勢にも優しさと「おもてなしの心」を大いに感じました。

会の終わりに，生徒の皆さんが感謝の言葉としてそれぞれ語っていたように，お年寄りと楽しい時間を共有したことは日常の生活では味わうことのできない「意義深い貴重な体験」となったようです。

生徒の皆さんにとって，このような交流会が，自分の家族や自分が暮らす地域について考えるきっかけになればと願う先生方の思いも，生徒の皆さんには十分伝わったと感じました。

「鍛麗 ～士魂迅雷～ 」 韮崎工業高校 第18代太鼓部

１月14日（月），東京エレクトロン韮崎文化ホールにおいて，韮崎工業高校第18代太鼓部によるコンサート「鍛麗（たんれい）」が開催されました。今年度は「士魂迅雷（しこんじんらい）」をコンセプトに，一人の侍が生涯を通して感じた喜怒哀楽が和太鼓で表現されました。ステージを覆い尽くす大きなスクリーンにプロローグとなる映像が流れた後，厳かな雰囲気の中でいよいよ演奏が始まりました。オーケストラとは異なり，指揮者がいないにもかかわらず，部員の皆さんの見事にシンクロしたばちさばきに先ずは驚かされました。演者自身も，ひとり一人の奏でる音がひとつに重なって，会場全体に響き渡るのを心地よく感じ，楽しんでいる様子が印象的でした。

演目は初めて耳にするものでしたが，そう感じないのは，日本人として慣れ親しんできた音だからでしょうか。どの演目もどこか懐かしささえ感じる不思議な感覚でした。また，太鼓の音が心に染み入って，身体が突き動かされる感覚もあり，太鼓は耳で聞くものではなく，身体全体で感じるものだと感じました。

圧巻の演奏もフィナーレを迎えようとした幕間，このコンサートで最後となる３年生の引退セレモニーが行われました。代表して部長の藤本美帆さんが，「皆様に支えられてここまで成長することができました！これからも後輩を温かく見守ってあげてください！」と，お世話になった方々への感謝の気持ちを述べると共に，後輩を優しく気遣いました。

日頃の鍛錬が実を結び，太鼓部は，山梨県高等学校芸術文化祭（郷土芸能部門）で3年連続最優秀賞を受賞し，来年度，佐賀県で行われる全国高等学校総合文化祭に県代表として参加することが決定しています。この晴れ舞台でも，華麗に鍛え上げられた精神力と技が遺憾なく発揮されることを大いに期待しています。

北杜市立高根北小学校 閉校式・閉校記念式典

３月２日（土），北杜市立高根北小学校の閉校式・閉校記念式典が，同校の体育館を会場に執り行われました。市内の小学校は少子化の影響等により，小規模化が進み，学校運営や教育活動に支障をきたす状況にあります。そのため，高根東小，高根北小，高根清里小の３校は3月末で閉校し，４月に，高根東小の校舎を使用して，新「高根東小」として開校することとなり，この日を迎えました。

在校生40名と教職員，来賓の方々に加え，幅広い年代の卒業生で溢れんばかりになった会場の様子から，高根北小が創立から145年もの間，3,000名を超える卒業生を送り出してきた伝統校であることをうかがい知ることができました。厳粛な雰囲気の中で閉校式が始まり，山本由美子校長から北杜市渡辺英子市長へ歴史が刻まれた校旗が返納されました。

後半の閉校記念式典は，和やかな雰囲気の中で始まりました。はじめに，児童の皆さんが一生懸命準備してきた調べ学習の成果が発表されました。高根地区の昔話や歴史・風土・文化，偉人坂本増次郎を輩出した高根北小の歴史などが，元気に，分かり易く，ユーモアたっぷりに語られました。どの学年の発表も非常に完成度が高く，会場からは共感・感嘆の声や温かい拍手が自然と湧き上がりました。続いて，卒業生によるパネルディスカッションが行われました。世代の異なる３名のパネラーが語る思い出を聴衆の皆さんも共有し，共に往時を懐かしんでいる様子でした。そして，式典も佳境を迎える頃，高根北小の代名詞的な存在となった太鼓の演奏が披露されました。終わりに，参加者全員が心を一つにして校歌を歌い上げ，記念式典は幕を閉じました。「最後の一年を最高の一年にしよう！」…高根北小を愛する皆さんの熱い思いが凝縮した一日でした。

平成３０年度　『中北.com』№6
編集･発行　中北教育事務所 地域教育支援
担当：深澤　隆二 ・ 伊藤　哲也
〒407-0024　韮崎市本町４－２－４
電話　０５５１－２３－３０４６
Fax　０５５１－２３－３０１３
※中北教育事務所のＨＰでもご覧になれます
https://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/